

保育の価値、成長発達の面から安全を検討する

: 未就学児施設におけるリスク・マネジメント

掛札逸美（心理学博士）

★保育の安全研究・教育センターのサイト：「保育の安全」で検索 <https://daycaresafety.org/>

★YouTube 等：上のサイトにリンク

リスク(／価値)・マネジメント＝価値とリスクの天秤を使うこと
≠事故(ケガ)をなくすこと

★ サイト→「コミュニケーション」→A-1

- ・ 価値の裏側にリスクがある（そもそも価値ゼロでリスクしかないなら、しない／取り除く！）。
- ・ 価値を上げれば、リスク（＝コスト[費用]を含む）も上がる。
- ・ 価値を上げつつ、リスク／コストが上がりすぎないように全体をマネジメントする。
- ・ たとえば、「組織マネジメント」なら、人の長所、短所を天秤にかけて…、です。

管理者と職員が、科学に基づいて理解しているか？ 保護者に伝えているか？

成長発達：命の大きなリスク

成長発達：無限大の価値

おとながかかわらなければ育たない

深刻事故が発生した場合の、園、職員の責任

深刻さにかかわらず、その種の事故が発生した時の保護者やマスコミ、社会の反応

自園や他園の事例、ニュース等から想定できているか？



必要な想定を保育等に反映しているか？



安全、衛生、健康、救急の、正確な理解 + 自園の環境と今いる園児の条件に合った方法
→ハザード、リスクを制御する基礎

実際に行動しているか？

個人、集団、個人差、日々の成長と変化に合わせた、おとなの足場かけ。環境の設定 = 保育の価値

日々、実際に行動しているか？



特に、環境や物（遊具、素材、食物等）は、成長発達に合わせ、両面から見た見直しが常に必要

★『3000万語の格差』

▶ 成長発達は無限大の価値：おとながかかわらなければ、子どもの可能性は十分に育たない

- ・ 従来の子育て、保育が間違っていたわけではない。より良い方法がわかってきただけ。
- ・ 特に、おとなも子どもも スマホに時間を奪われがちな今の環境では、科学の支えが不可欠。

↑ 成長発達に必須なかわり、活動が減る

★『子ども育ての本』+発行し始める資料

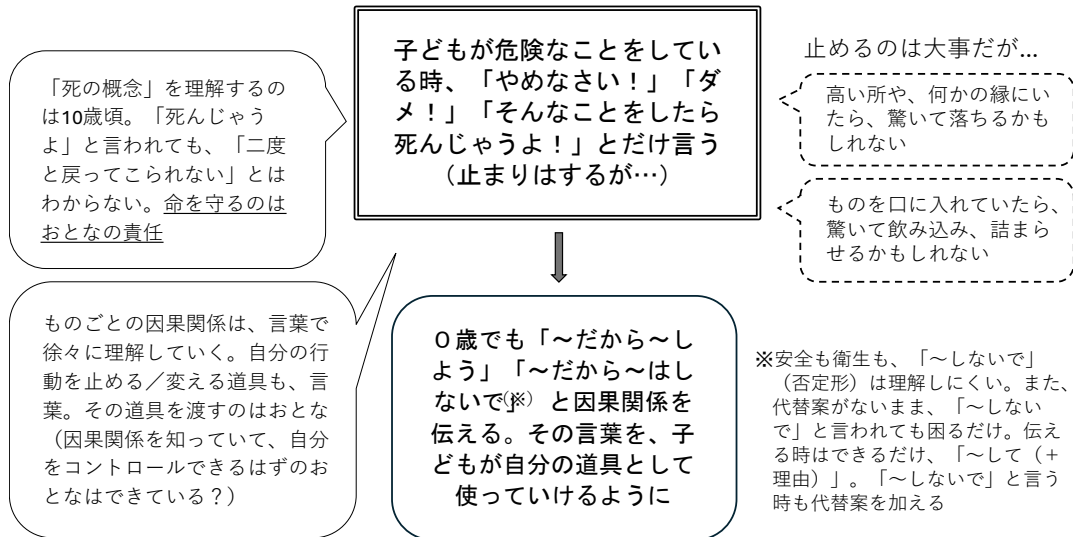
▶ 成長発達はリスク。時に命も奪う

★『子ども育ての本』

- ・なんでも、してみたい！ 真似たい！ ← 成長発達のエンジンでもある
- ・未就学児は「死」の概念を理解していない。命を守るのはおとなの責務。
- ・4～5歳も因果関係を学ぶ途上。「こうすると危険」は理解していない。

言葉の習得＝
因果関係の理解

自分で自分を守り、動かす道具(言葉)を 子どもに渡す



★『子ども育ての本』の45ページ、「デザートを先に食べる」も同様

▶ 保育の価値：科学に基づくもので、リスクとのバランスを合理的に考えることが必要

- ・子どもの身体・脳発達、認知・非認知スキルの発達を科学として理解している。
- ・子ども一人ひとりの発達段階(修正月齢も)、集団、個人差を考慮して成長発達を支援する。
＝いずれも保育士が有するべき専門の知識であり、スキル

★『子ども育ての本』

A.保育の価値を自ら否定する認知/言葉

AI台頭の今が、昔と同じ？

- ・「ずっとこうしてきたから」：経験と主観に代わる、根拠に基づいた方法があるのに？
- ・「子どもはこういうもの」「こうあるべき」：子ども理解が進む一方、社会も急速に変化。
- ・「自分の子どもはこう育ててきたから」：サンプル数＝1をあてはめる乱暴さ。
- ・「～させてあげたい」「～できない(する)のはかわいそう」：保育者の主観。それは今の科学に照らしても価値？ 今の社会の中で価値？ それを未就学児期に園でしない結果、人生で失うものがある？ 人生を失うような深刻な結果になったら誰がかわいそう？
- ・「子どもはケガをしながら育つもの」「とにかく、ケガをさせないで！」：ケガにつながるできごとの中には、明らかに予防できないものと、保育の質として予防できる／すべきものがある。両者を分けられる？ 予防できるものについては、環境と活動の面から予防を考えられる？

★本資料「俯瞰図」のケガ参照

B. 専門性を
自ら否定する
認知／言葉

下のいずれも認知の歪みであり思い込み。他人の子どもの命を預かる、成長発達の専門家が言うことではない。

- ・「大丈夫。心配しすぎ」：(根拠があれば、もちろん言っている言葉。)
- ・「とにかく心配。やめよう」：ハザードやリスクの根拠がないなら、対策を考えないリスク偏向。
- ・「子どもはできないから大丈夫」(環境として、できないはず)：子どもが意図しなくても「できてしまう」ことは多々ある(例：カギ開け)。「どうすれば、できてしまうか?」を考えるには、成長の次の段階や子どもがもたらす結果を理屈で想定する力を要する。
- ・「できないから大丈夫」(発達段階として、できないはず)：子どもは日々、「できるようになっていく」。おとなの想定を裏切るのが子どもの育ち。成長の次の段階や起こり得る結果を想定できれば、「大丈夫」に根拠があるかないかはわかる。
- ・「しないから大丈夫」：根拠ナシ。+「しよう」「真似たい」という子どもの内的動機を軽視。
- ・「伝えているから／わかっているから大丈夫」：因果関係は学習中。「死」も理解していない(前ページの上半分)。おとなでも「伝えたから大丈夫」は危うい。
- ・「できるから大丈夫」：たとえできて、しない時、できない時がある(おとなも同じ)。
- ・「危険予知力をつけなきゃ」：以上見すら、因果関係を理解し始めたばかり。「ダメ」「やめて」では因果関係を理解できない。おとなでも、因果関係をそれなりに理解していて、危険な結果の予測力(X予知力)があるはずなのに事故を起こす。
- ・「見守っているから大丈夫」：見守っている「つもり」で、見ていないのが人間の脳。
- ・「『ちょっと』のケガだから」：保育の質として予防できる／すべきできごとではなかった?
- ・「ケガにはならなかったからいい」：保育の質として予防できる／すべきできごとではなかった?
- ・「子どもが～したから」「子どもが『したい』『食べたい』と言ったから」：子どもの責任?
- ・「保護者が『(この活動)をして』と言うから」：深刻な結果が起きた時、保護者は「自分の責任でこうなった。園の責任ではない」と言う?
★ サイト→「コミュニケーション」→B-3
- ・「今まで、(その危険なこと)をした子どもはいない」：「これまで大丈夫だった」は、「これから大丈夫」を保証しない(おとなが見ていない所で、している子どもも必ずいる。悪い結果に至らなただけ)。
- ・「今まで(そんな事故は)起きていないから大丈夫」「昔の子どもはたくましかったのに、今は…」：
「自分は／昔は／これまでは(大丈夫だった)」は、あなたやあなたの子ども、園児たちが運よく深刻事故を経験せず、今日まで生きてこられたから言えること。死んだ子どもたち(=忘れられている)や、子どもの死を経験した先生たちを冒瀆しないで。

リスクには
「確率=運」
が含まれる

★ 「命のリスク大」のできごとから予防する
→本資料の俯瞰図参照

人間(おとな)の認知は感情に支配され、自分に都合のいい方向へ歪む。
命を守り、子どもを「より良く」育てるには、意識的に感情と認知を操作する必要がある。

具体的なできごとで考えると…

できごと1:玩具や活動の道具による誤嚥窒息

上のA、Bをあてはめて
みてください

★ 誤嚥と誤飲は異なる:
本資料の俯瞰図参照

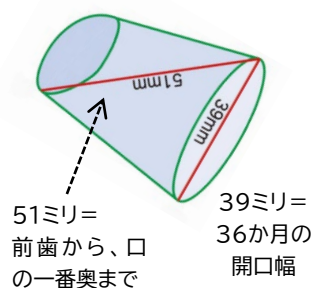
- ・ つるつるコロロン：つるつる=材質、コロロン=切り口が円（球はどう切っても円なので最も危険）
- ・ 飲み込める大きさ、飲み込めなくても喉をふさぐ大きさ

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

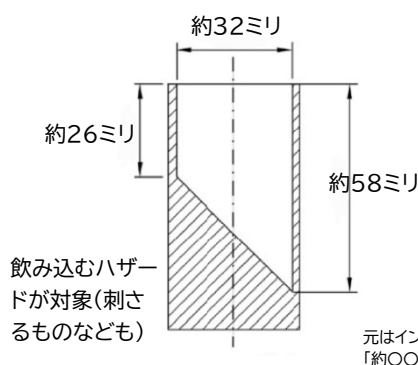
- ・ 「子どもが好き。よく遊ぶ」「もったいない」：その玩具や道具がなかったら、その機能は育たない？ より良く、かつ安全なものはない？ 命と天秤にかける価値？ 心配しながら使う価値？
- ・ 「見ている」「口に入れないよう言っている」「使う時だけ出す」：子どもが口に入れるのは当然。口に入れるのも、飲み込むのも、詰まるのも一瞬。出ない時は何をしても出ない。
- ・ 「売っているものだから」「ヨーロッパの〇〇製だから」：日本には、玩具等の安全基準がなかった（STは業界団体のもの）。2026年以降発売のものには玩具の国際規格（ISO8124-1）が適用されるが、すでに売られているものは対象外。

36か月未満向けの安全基準

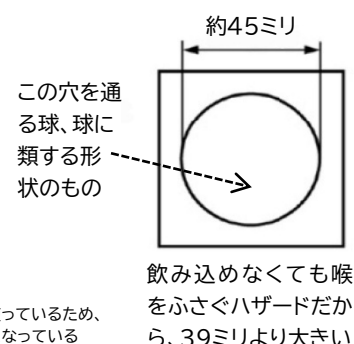
日本の誤飲チェッカー
(誤嚥も一括した基準)



国際規格 ISO8124-1 の誤飲の基準



ISO8124-1 の誤嚥窒息の基準



★ サイト→「安全」→4-1、4(附)(1)誤嚥窒息事例

- ・ 誤飲と誤嚥は違うできごとであり、基準も異なる。日本は一括して扱っていた。
ISOの基準の通り、39ミリ以上の球状でも喉をふさぐ。
- ・ 飲み込める小ささでも、気管に吸い込めば誤嚥窒息する可能性がある（完全／不完全閉塞）。
子どもの気管は数ミリと狭いので、球状でなくても詰まる。 ★ サイト→「安全」→2-2
- ・ 誤飲して命にかかわるのは、主に、磁石、ボタン電池、水でふくらむ玩具、刺さるもの。
★ サイト→「安全」→4-4
- ・ 欧米では販売、使用できない／できなくなった製品が日本では売られている、使われている。
この状況に対処するためもあって、昨年末、消費生活用製品安全法が改正された。

できごと2:食物による誤嚥窒息

A、Bをあてはめてみて

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

- ・「〇か月だから、～を食べられる」: 修正月齢は? 反射は消えた? 舌の動きは? 奥歯は生えている? 離乳食で「丸呑み」をさせていない? 歯や口腔機能はせかして育つもの?
★ サイト→「安全」→4-2 の付帯「誤嚥事故防止のための食材整理表」
★ 今年度、発行し始める資料
- ・「なんでも、たくさん、早く食べられるようになって」: 食べたくないものを食べさせられる影響は? 将来の食行動に及ぼす影響は?
- ・「丸いもの、固いものも噛めるようになってほしい」: 噛む練習は、丸いものや固いものですか? 価値があるとして、その価値は命と天秤にかけられるもの?
- ・「いろいろな味を知ってほしい」「好き嫌いをなくしたい」: 子どもは生き物として自分を守るため、偏食なのだと知っている? ★『子ども育ての本』、40ページ～
- ・食事は誰もが必ずしなければならない価値。避けることはできない→できごと1との大きな違い
- ・複数の死亡/意識不明事例から、より危険なもの/食べさせ方が明らかになってきた。
★ サイト→「安全」→4 附(1)誤嚥窒息事例。YouTube ライブにも

できごと3:睡眠中の異常、死亡

A、Bをあてはめてみて

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

★ サイト→「安全」→3-1、3 附(1)、
定番 YouTube

- ・「(あおむけに返して、)起きたらかわいそう」: 0歳はずっと眠るものではない。「子どもが起きたら、仕事ができない」? 睡眠チェックとあおむけ寝は、国や自治体が指示していること。
- ・「食事が終わったら午睡」: 胃が動いているのに、誰もがすぐに眠れるもの?
- ・保護者が「午睡させて」「午睡をさせないで」と言う: 夜間睡眠の大切さ+昼寝はあくまで「眠気を払うため」と説明している?
- ・成長に不可欠なホルモン類が特に分泌されるのは、夜間の睡眠中。午睡が夜間の睡眠の質を下げるリスクも。3歳以降は、全員を必ず午睡させる必要はない。
- ・誰でも眠気が来ることはあるのだから、いつでもちょっと横になれる環境を(おとなも)。
- ・眠くない子どもを横にさせ続けられれば、退屈ゆえにいろいろし始める。

できごと4:熱中症。暑い時期の外活動、水・プール活動

A、Bをあてはめてみて

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

- ・「夏ならではの遊びをしなれば」: 霜も氷も雪も減っている冬、同じことを言う? 私たちおとなが引き起こしている気候変動で子どもの命を危機にさらす? ところで水不足は?

- ・「外で／プールで遊ばないのはかわいそう」：命を奪うリスクとのバランスは？ 水に入っている実際の時間と、子どもと職員が前後に費やす準備時間、子どもが待つ時間のバランスは？
- ・「水の危なさを学ぶのは大事」：子どもは死（の危険）の概念がない。トラウマになったら？
- ・「暑くて具合が悪くなったら、中に入ってと言ってある」「水を飲んでいる」：おとなでもわからないのに？ 保育者も熱中症で倒れている。水を飲んでも、暑ければ熱中症は起こる。
- ・「体を思い切り動かさないと午睡しない」：午睡のための活動？
- ・「外で遊ぶと、よく眠る」：暑い時期の疲れは、熱中症によるものでは？
- ・「暑さに慣れるのは大事」：人体が慣れる気温＋湿度には上限がある（すでに上限超え）。
- ・「保護者が『外遊び、プール』と言うから」：深刻な事故が起きたら…？ ★ サイト→「安全」→7-1、8-2にひな型
- ・「水に入っていれば涼しい」：頭はほぼ常に、外に出ている。
- ・「日陰だから」「風があるから」：その場所で気温と湿度を測っている？ 事故が起きたら、気象台の気温、湿度、熱中症指数は報道される。 ★ サイト→「安全」→7、8-2
- ・水を使った活動は屋内でもできる。
- ・盗撮のリスク。

A、Bをあてはめてみて

できごと5:いなくなる＝置き去り、取り残し、閉じ込め、閉め出し、出ていくなど

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

★ サイト→「安全」→2(附)(1)置き去り、取り残し事例。定番 YouTube の 10

- ・活動中「人数確認をしているから大丈夫」：いるべき人数は正しい？
- ・朝夕「人数確認をしているから大丈夫」：送迎時間帯は人数が変動するのだから、「誰がいるか」を確認する必要性＝所在確認
- ・「移動の前後に人数確認しているから大丈夫」：絞扼ハザード（隙間やヒモなど）や溺水ハザード（水）の場合、人数確認をした時には間に合わないかもしれない→所在確認でも人数確認でもなく、危険な場所に「子どもがいない」確認
- ・「閉じ込められたら、このクラクション／ブザーを鳴らして」：眠っていたら？
- ・「いない」は頻発する。全員を完璧に「見張る」ことは不可能で、それは保育者の仕事ではない。だから、「早く気づくための確認行動」が不可欠。
- ・閉じ込める場所（バス、トイレ等）、閉め出す場所（屋上園庭等）＝狭くて空間が限られた場所。施錠前に「誰もいない」確認が可能。
- ・×「誰がいる？」：返事をしないリスク大。眠っているかもしれない。気まづいかもしれない。「この状態でいたら死ぬかも」という因果関係は理解していない。
- ・首がはさまるすき間、体が抜けて頭が残るすき間、首がかかるヒモなどの絞扼ハザードはある？
- ・首が押されたら、泣くことも助けを呼ぶこともできない。数分で命の危機。

★ サイト→「安全」→5-3、5(附)(1)絞扼事例

- ・無用な絞扼ハザードはワイヤーネットなどでふさぐ。ふさぐ／なくすことができないなら、その場所を保育者がくりかえし確認する。

★『保育者のための「ハザード」教室』
42、110ページに詳細

できごと6:散歩、遠足

A、Bをあてはめてみて

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

★ 定番 YouTube (園外活動はリスクが多い!)

★ サイト→「コミュニケーション」→B-2 にひな型

- ・「子どもは自分たちで歩けるから、保育者1人、2人で連れていけばいい」: 交通事故や大地震で保育者が1人、動けなくなったら?
- ・「歩く経路はその日その日で決めたほうが楽しい」: 事故や災害の時、園から向かった職員がすれ違ったら? (電話は通じないかも)
- ・「保護者が『毎日、散歩へ行って』と言う」: 深刻な事故が起きたら…?
- ・「バス遠足は、子ども(保護者も)が楽しみにしているから」: 環太平洋火山帯で地震が増えている今、バスで出かけても徒歩で戻れることが必須 (迎えに行くこともできない)。

できごと7:ケガ

A、Bをあてはめてみて

保育の価値、成長発達の科学を阻む認知

★本資料「俯瞰図」のケガ参照

★ サイト→「コミュニケーション」
→A-3~A-7にひな型

- ・「子どもはケガをしながら育つ」「ケガはとにかく防がなければ」: ケガにつながるできごとの中には、保育の質 (環境、かかわり) として予防できる／すべきもの、予防できないものがある。
- ・「保護者が『ケガをさせないで』と言う」: 上の2つを区別する旨、4月に説明。都度、説明。必要に応じて、見守りカメラの映像も見せる。(見守りカメラは、園を守るため)
- ・「子どもが『〇〇をしたい』と言ったから」: 無理だとわかっていた?
- ・「〇〇ができないから、〇〇を練習させよう」: 下↓

★『子ども育ての本』

- ・発達は「できる 対 できない」ではなく、「できるようになっていく」。いつ、何がどのようにでき始め、何がまだできず、身体的にはいつ、何がどのように危険か、説明できる?
- ・ある動き／機能がうまくできないなら、「前の段階の必要な発達」と「周辺、必要な発達」を、日常のあらゆる場面に入れる。
例: スプーンで食べようとして、こぼしている段階なら?
- ・基礎になる動きや筋力の育ち (未満児期) を、その後も常に組み込む。
- ・複数の動きからなる活動は、バラバラにしてそれぞれを育てていく
例: 大縄跳び: 同じ場所で同じリズムで跳び続ける、時差を考えに入れて飛び込む、など。
だるまさんが転んだ: 聞く、見る、すぐ動く／止まる、ぶつからないように走る、など。
- ・セットに見える動きでも、体の動きは違い、難易度は異なる。両方が同時にできるわけではない。
例: 握る (反射) < 離す (意志) 0歳児が立ち上がる < 立位から座位になる
窓を開ける < 閉める 段をのぼる < 段をおりる 大きなボールを受け取る < 投げる

成長発達、活動／保育の価値と、ケガのリスク

ケガは、できごとによって、予防可能性も想定される結果の程度も大きく異なる→本資料、俯瞰図の「ケガ」を参照

【基本】

「続けられ、できるように」

例：床に座る、立ち続ける、歩く、イスに座る、スプーンや鉛筆を持つ等の動作
 悩みの例：「つかまり立ちして、後ろに倒れる」＝立ち続ける、自分で座るはまだできない、「椅子に座ってはいられません」

その動作をするために必要な、全身各部位の骨格、筋肉、動きは育っていないければ、その動作だけを練習しても無理

「座り始めた」「立ちあげ始めた」段階では、姿勢がうまくなくても、自分で前の姿勢に戻るこれできない。(立っている→突然倒れる)

「何度も練習すれば、できるように」

例：スプーンで食べる、たたむ、ヒモを結ぶ、縄跳び、鉄棒、雲梯、ドッジボールなどの活動（スポーツを含むあらゆる活動）

その動作や活動に必要な五感のスキルは？
 必要な認知スキルは？
 認知スキルと運動機能のつながりは？

その動作や活動に必要なものは？（分解してください）
 それぞれの動作について必要な骨格、筋肉、運動機能...

すべての動作、活動は「その前」 + 「目に見えない部分」の育ち、練習を必要とする

- 「できるようにしていく」（できない時、したくない時が頻繁にある） X「できる」
- 目標を設定した「逆算」は不可能。その子の月齢（修正月齢）、成長発達の速度と特徴に合わせて、適切には進まず、危険（せかせせは、前の段階が不十分のまま）
- 外から見て「できていない部分がある子ども」に、できない部分だけを練習させればよい、ではない。「前」「目に見えない部分」は、すべての子どもに価値がある

【応用例】

園庭が狭くて、鬼ごっこができない！ こんな環境では十分な保育ができない

鬼ごっこを十分かつ安全(*)にするために必要な子どもの要素は？

※どんな事故が起きてても保護者は何も言わない、という場合、「安全」は不要かもしれないが...

それなりに安定して走り、障害物を選べる身体機能

この機能の複雑さを理解すると、鬼ごっこを「走る」「避ける」を練習する手段と考えることはできない。

認知した外界情報に対する身体への反応は？
 反応時間は？

自分の身体と外界に対する認知スキル（複数）
 (例：後ろを見てもやみに走っていれば、必ずぶつかると、または、つまずく)

「保育の質」そのものの問題

走り始めた子どもたちに「鬼ごっこするよ！」と言い、子どもを追いかける保育士は、上記+転んでケガをするリスクを理解していない。そのようにして起きた転倒、ケガは、保護者が何も言わないとしても、「育ちの価値」として容認していいのか？

明らかに危険な環境（つまずく／ぶつかるとの）の制御を保育者が考えずに起きたケガは？
 「前を見て！ 転ばないようにして！」 「気をつけて！」と注意することが「保育の質」か？

成長発達、保育の価値と、ケガ(安全)、感染症(衛生)のリスク

結論

「オムツやパンツを替える／履かせる」は、排泄ケガの一部としておとながする。「着脱」の範疇に入れない + 臥位か立位*のみ

詳しい内容、および「毎回、消毒する必要のないオムツ交換方法は、「保育の安全」サイト→定番YouTube「未就学児施設における感染症予防と対応」シリーズの6と11

「座れるようになったから、オムツ(パンツ)は座らせて着脱／交換」

「パンツで着脱の練習をさせた
い」

←現状で、感染症リスクを上回る価値とみなす? (※※)

←オムツ(パンツ)を履いた状態で短パンやズボンを履く練習をすればよいのでは? (ズボンのほうが履くのは難しいのだから)

裸のお尻で座らせれば、そこに、感染源(ノロ、ロタ等)ができる(※※)

「座れるようになってきた」だけであって、座位が安定しているわけではない。座っていたくない時もある→倒れる

「壁や保育者の肩を持って立ち上がれる子どもは、立ってオムツ(パンツ)を履いている(はず)」

- ・「毎回、消毒する」←手間は? 消毒薬(次亜塩素酸ナトリウム)は肌にも有害、吸い込むものも有害(※)
- ・「その子のタオルを敷く」←タオルに触れたら? 洗濯で汚染拡散?

「座る練習をしないと」←座位の安定は「座る練習」ですもの? 座る練習が必要だとしても、この状況下、感染症のリスクを上回る価値とみなす?

立位が安定しているわけではない→座る(保育者が気づかない場所に感染源)。倒れるリスクも

*立位でも、保育者がすぐに履かせる

【別の視点】子どもを下半身裸の状態にし続けることは、今の「保育の質」に合致するか?

※※何か変わったのか：新型コロナによって「感染症こわい」「消毒(除菌?)しなきゃ」という感情(≠科学)が日本文化、園に定着してしまった。もしも新型コロナ「前」に戻れるなら、上のような問題はさほど気にする必要がない。そもそも、あらゆる感染症をゼロにすることはできないのだから。でも、「感染症こわい!」という感情を捨てられないなら、座らせてオムツ(パンツ)を替えることはやめるべき。

※アルコール(消毒薬)はノロやロタに効果なし。かつ、アルコールも有害物質。また、「消毒薬」と厚生労働省が呼んでいないもの(例：除菌剤、次亜塩素酸水)は、ウイルスや細菌に対する消毒効果が認められていない(メーカーや販売者がどう宣伝していても)

「できごと」と「結果」の俯瞰図：ケガ以外(命の危険性が大きいもの)

ところで、その「価値」は、「今の時代」「その発達段階の時に」「園の責任で」「集団(保育)の中で」しなければならぬ価値ですか？ 成長発達の科学や命の危険を無視した「良かれ」、成果主義の押しつけではありませんか？

できごと

命の危険大

息ができなくなった
息ができなくなる危なさ
(ハザード)がある

[2-1, 2-2, YT19~25, ハザード教室]

できごとがなんであれ、結果(死亡、脳障害)を決めるのは「息ができない時間の長さ」

食事は避けられない

ハザード(物、環境)の制御が可能

水中の異常にすぐ、必ず気づける方法はない

条件上、最も危険

喉か気管に食物が詰まる(誤嚥窒息)

[4-2, YT21~25]

喉か気管に玩具や物が詰まる(誤嚥窒息)

[4-1, YT20]

首が絞まる/押される(絞扼)

[2-2, 3-1, 3-4, YT26, 27]

鼻と口がふさがれる

溺水

[7] 条件上、最も危険

気道異物除去をしても、解除できない可能性あり

詰まりやすい材質、形状は明白

早く見つけさえすれば、息ができない状態を解除するのは容易

誤嚥：嚥下しそこねて、喉か気管にはさまっている

(喉か気管が完全に詰まったら完全閉塞=誤嚥窒息)

誤飲：体内に入れてはいけないものを飲み込んだ状態(0歳のハチミツ、子どものアルコールも誤飲)

命の危険大

誤飲した
誤飲ハザードがある

きわめて危険なのは
・ボタン電池
・水でふくらむ玩具

(4-4)
・磁石
・体内で刺さるもの

左以外は健康観察、便の観察

命の危険大

[8-2, YT36, 37]

狭く、閉じられた場所に閉じ込めた
屋上園庭に閉め出した

暑熱ハザード(高温、高湿)

取り残さないことが容易。「誰もいない」声出し指差し確認を必ずする。(職員の行動ルール★)

[YT10]

園の敷地から外へ出た
散歩中に見失った

・送迎時間帯は保護者の責任も大きい(保護者の行動ルール★) [B-2のひな型]
・バリア(鍵、パーテーション等)を増やして、敷地から出るまでに時間がかかる(職員が気づきやすい)ようにする。鍵は必ずかける等、おとなのルール★
・散歩の見失いを防ぐ基本は、「子どもの数を減らす」 [YT12~15, 5-2, B-2のひな型, ハザード教室]

人数確認は「いなくなつた」と気づく方法であり、気づいた時には手遅れかもしれない。対策は「いなくなつたようにする」「出ていけない/出ていきにくい環境にする」

アレルギー源に曝露(誤食、粉塵の吸入、接触等)

・診断書のない子どもが発症することもある
・「口にする」以外の曝露経路もある
・製造/納入ミス、ヒスタミン食中毒は園の責任ではほぼない [6附(1)]

「口にした」「食べる直前に気づいた」事例(=職員の行動ルールがすべて失敗)よりも、納品~配膳に気づけた事例を活かす。行動ルール★が奏功しているとわかり、効用感も上がる [2-6]

〜し忘れ
〜し間違い

・人間の脳の基本は「ぼんやり」→「忘れる」「間違える」は当然 [2-6]
・本人が気づける方法(声出し指差し確認等★)、他人が気づける方法を
・異物混入は「とにかく目視確認」ではない [6-1] [2-3, 2-6, YT9]

★行動ルールは曖昧(×気をつける、注意する等)ではダメ。「誰がしても同じ行動になる」ように記述する=マニュアル [2-7] [YT5]

大前提1: 子どもの命を守るのとはおとなの責任。未就学児はまだ死を理解してない

掛札逸美

心理学博士（社会／健康心理学）：専門は安全の心理学、コミュニケーションの心理学

- 「保育の安全」サイト（「保育の安全」で検索。YouTube等のリンクもここにあります）：
<https://daycaresafety.org/>

略歴

1964年生まれ。筑波大学卒。（公財）東京都予防医学協会広報室に10年以上勤務。

2003年、コロラド州立大学大学院心理学部応用社会心理学科に留学。健康心理学専攻。2007年1～2月、世界保健機関（WHO）協力機関・カロリンスカ研究所／医科大学公衆衛生学部社会医学部（ストックホルム）が開催する「国際傷害予防集中コース」（5週間）受講。2008年2月、心理学博士号取得。同5月卒業、帰国。

2008年6月から2013年3月まで、産業技術総合研究所特別研究員。

2013年4月、NPO法人保育の安全研究・教育センター設立・代表理事。2020年3月、NPO格を返上、任意団体化。

委員等

「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員（内閣府、厚生労働省、文部科学省）

「千葉県社会福祉審議会児童福祉専門分科会施設部会 保育に係る重大事故検証委員会」委員長（2016年12月26日～2017年8月31日）。現在も同委員。

主な（共）著書、訳書

	2023年	2018年	2022年
 <p>21世紀の証拠に基づく「子ども育て」の本</p> <p>掛札逸美 ◎ 酒井初恵 ◎ 高木早智子 著</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 21世紀に出た研究論文など150を含む200の証拠 ○ 生まれた瞬間から子どもの脳と体を育てる科学的な方法 ○ 未就学児施設で「より適切な保育」をつくる根拠 ○ 子どもを入園させるなら、こんな保育をしているトコロ! 	 <p>保育者のための「ハザード」教室</p> <p>イラスト・図解で 子どもをとりまく「ハザード」の見つけ方と対策がわかる!</p> <p>保護者あて掲示・おたよりの見本 もたっぷり 危なさの伝え方がわかる!</p>	 <p>3000万語の格差</p> <p>赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ</p> <p>グナ・サスキンド 著 掛札逸美 訳 高山静子 監訳</p> <p>Tune In, Talk More, Take Turns</p>	 <p>ペアレント・ネーション</p> <p>親と保育者だけに子育てを押しつけない社会のつくり方</p> <p>グナ・サスキンド 著 掛札逸美 訳</p>
	 <p>保育者のための心の仕組みを知る本</p> <p>橋本ミサト (文) + 橋本ミサト (絵)</p>	 <p>子どもの「命」の守り方</p> <p>掛札逸美 著</p>	 <p>保育現場の「深刻事故」対応ハンドブック</p> <p>山中隆宏 寺町東子 栗並えみ 掛札逸美 共著</p>